
2000年度言語研究センター主催 講演会についての報告

西野清治

今年度は、下記の二人の先生に講演をしていただくことができました。無理を言ってお願いしたにもかかわらず、お二人の先生ともこころよくお引き受けくださいました。深く感謝いたします。また、講演会に参加してくださった皆様、大変ありがとうございました。以下に、講演内容を簡単に紹介させていただきます。

第一回目「サンスクリット、およびサンスクリットの文献」

湯田 豊（神奈川大学教授）

10月25日(水) 参加者約15名

湯田先生は、今年『ウパニシャッド— 翻訳および解説—』（大東出版社）を出版され、それにより第36回日本翻訳出版文化賞を受賞された。そこで、今回、先生のご研究の周辺で、何か言葉を中心にすえたお話をしていただけませんかということをお願いした。講演では、おもにサンスクリット語について、できるだけ易しく話していただいた。私自身、サンスクリット語を勉強したことがないので、ここで先生のお話を正確に報告することはできない。ごくおおまかなまとめになってしまうが、先生は、まず、サンスクリット語の音韻とシンタクスについて解説された。そして、それと平行するような形で、百科事典の中に掲載されているサンスクリット語に関する記述について、批判等も交えながら解説された。「サンスクリッ

ト語がインドヨーロッパ語の祖語であるということや、「サンスクリット語は、ヴェーダ語の方言であり、文法家によって規範化され、洗練されてできたものである。」というようなことを指摘された。

私自身、サンスクリット語はギリシア語やラテン語の親戚のようなものであるという認識をもっていたので、サンスクリット語の表記もアルファベット形式でなされるものだと思いこんでいたところ、1つの文字が1つの音節を表すのだということを知り、日本語の「あいうえお」と同じではないかと思い、驚いた。後で先生に聞いたところによれば、日本語の50音はサンスクリット語の表記法を手本にして作られたということであった。
